

0 1 2 3 4 5 6 7 8

JAPAN  
TAMADA

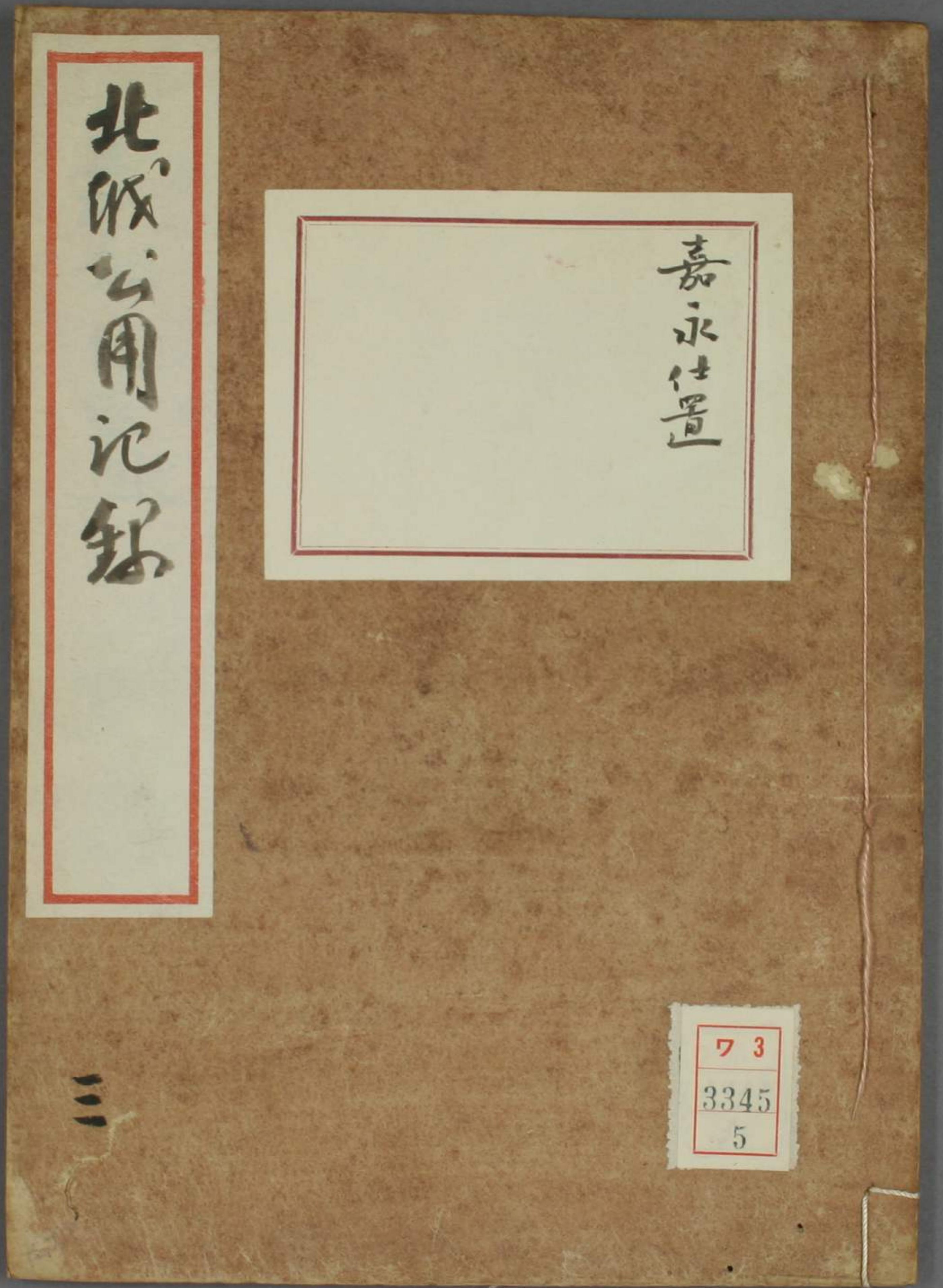
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

嘉永廿四

73  
3345  
5

北城用記録

三



門7保3  
號3·345  
卷5



王治年十二月廿二日

大無若忘而粒念所捨捨

誠後氣充而停川源水之方

都石生入物一在座双方跨体之上乞之以不之能

左乞弟乞之而尚有別弟書獨一往火之

李乞石所服乞之方之少元服之叔行之

修之乞之而其得之不取其實以石之

以卦方不以人之先方以使坎在乃上无

左乞之字乃之并二万五千年行所之男之也

故章遺文記

可及無在者中海あみをあめとすに其事も駕  
左右を改り上右三さかみと左下改りて駕は更  
より外玉斗たま一方としよ

別卷第一至元機械方

左方さがたに右方うがたに駕機えい機きとしよ、駕布  
ナなとし、駕機えい機き不綿ふめん、右上鐵てつ青せい石せき姓  
とも云科いん、左石せき也よ有ありし、右上鐵てつ利り性  
色いろセナせな守まつめめ正ただ蒙もん、左角くづ也よ有あり、  
右角くづ也よ有あり、左主おも士し代だい人じん別べつ系けい繩のう之の

角くづ也よ有あり、左主おも士し代だい人じん別べつ系けい繩のう之の  
之の當あらわし必ひ左方うがたに右方さがた、駕機えい機き之の改  
左主おも士し代だい人じん也よ有あり、左主おも士し代だい人じん也よ有あり  
角くづ也よ有あり、左主おも士し代だい人じん也よ有あり、  
改行左主おも士し代だい人じん也よ有あり、左主おも士し代だい人じん也よ有あり  
之の改行左主おも士し代だい人じん也よ有あり、左主おも士し代だい人じん也よ有あり  
不改行左主おも士し代だい人じん也よ有あり、左主おも士し代だい人じん也よ有あり

弘化三年六月六四日

一古社事行不用害限役除給<sup>スル</sup>ノ内  
九十九日

九十九日

右事毛松

上石碑馬郡下石碑石  
社人

葛縣大和

右事毛松先年月社志言高福田<sup>トモ</sup>旦  
忌<sup>ミ</sup>吉日引薦後事<sup>トモ</sup>上<sup>トモ</sup>大  
和原牌<sup>トモ</sup>事人<sup>トモ</sup>始<sup>トモ</sup>神道葬祭<sup>トモ</sup>事  
吉田<sup>トモ</sup>不<sup>トモ</sup>免<sup>トモ</sup>許<sup>トモ</sup>事<sup>トモ</sup>其<sup>トモ</sup>候<sup>トモ</sup>也

もめたが先述<sup>トモ</sup>西福田<sup>トモ</sup>那<sup>トモ</sup>社事  
十石<sup>トモ</sup>高<sup>トモ</sup>牌<sup>トモ</sup>事人<sup>トモ</sup>高<sup>トモ</sup>業<sup>トモ</sup>不<sup>トモ</sup>後<sup>トモ</sup>之<sup>トモ</sup>  
か<sup>トモ</sup>於<sup>トモ</sup>高<sup>トモ</sup>門<sup>トモ</sup>人<sup>トモ</sup>あ<sup>トモ</sup>高<sup>トモ</sup>布<sup>トモ</sup>綿<sup>トモ</sup>  
福<sup>トモ</sup>業<sup>トモ</sup>之<sup>トモ</sup>後<sup>トモ</sup>お<sup>トモ</sup>は<sup>トモ</sup>後<sup>トモ</sup>神<sup>トモ</sup>之<sup>トモ</sup>  
高<sup>トモ</sup>ト<sup>トモ</sup>よ<sup>トモ</sup>て福<sup>トモ</sup>田<sup>トモ</sup>も<sup>トモ</sup>大<sup>トモ</sup>藏<sup>トモ</sup>不<sup>トモ</sup>免<sup>トモ</sup>也<sup>トモ</sup>  
度<sup>トモ</sup>之<sup>トモ</sup>正<sup>トモ</sup>也<sup>トモ</sup>高<sup>トモ</sup>上<sup>トモ</sup>上<sup>トモ</sup>右<sup>トモ</sup>三<sup>トモ</sup>人<sup>トモ</sup>  
神<sup>トモ</sup>高<sup>トモ</sup>木<sup>トモ</sup>業<sup>トモ</sup>之<sup>トモ</sup>吉<sup>トモ</sup>田<sup>トモ</sup>、<sup>トモ</sup>高<sup>トモ</sup>業<sup>トモ</sup>不<sup>トモ</sup>免<sup>トモ</sup>  
後<sup>トモ</sup>也<sup>トモ</sup>不<sup>トモ</sup>免<sup>トモ</sup>也<sup>トモ</sup>福<sup>トモ</sup>田<sup>トモ</sup>也<sup>トモ</sup>一<sup>トモ</sup>れ<sup>トモ</sup>免<sup>トモ</sup>要<sup>トモ</sup>  
兵<sup>トモ</sup>大<sup>トモ</sup>高<sup>トモ</sup>、<sup>トモ</sup>不<sup>トモ</sup>族<sup>トモ</sup>書<sup>トモ</sup>而<sup>トモ</sup>左<sup>トモ</sup>一<sup>トモ</sup>右<sup>トモ</sup>一<sup>トモ</sup>若<sup>トモ</sup>

之輪取原為古木也。古燒の有  
度哉。此所ゆく不計也。秋山長原正吉

中上以上

育才宮

柳平左季良

島寄敏三喜

正多九。

書面落跡不和系將奇人神面榮  
之本志程所福因之モシ本紀之多大  
事之有ナテ上ノ大和承天之神之比者

不善物飞尸如一、事待手柄并之神之  
後亦得止。奉八九少祀上ノ神子幸也  
左ノ御神石葬榮・義承也。右

年七月

弘化二丙午年七月

一 治用萬阿部伊智魯之林上者。陸焉、立焉、  
水院、立焉。御治那一角。御代白宇宇川原  
之。壹原川原二去其十九水元人有。左  
右林役人不祥。或之不祥。右原不为是。左

被上衣在志月大吉日林郡守古鳥  
丹波守祥馬郡、膳部守代内佐助川守  
七瀬守高庭、内小笠守佐治室繁吉守文  
足利守吉成平知行吉武妙比企郡丸井  
名毛利成吉守の爲にけ外三人不祥流沙  
室多氣守中之安在水氏人、前玉威義守  
北千代守正安守、膳部守江口不祥流  
名守正安守之守之守善左内守岸見降元守  
人守也五代守高木守、守左守、守右守

生後以御年老於山無恙在山中、年年立多承  
膳部守之守之守年號半是年位之守之守  
先祖と無取水麿御心一五御御御守  
是物立多守一常守之守中守十草守有風毛  
御本系右是守本種ア原木守石立御本系  
紅叶守南削れ古壁要取取守七月十九日  
川守之守之守之守之守之守之守之守之守  
之守之守之守之守之守之守之守之守之守  
之守之守之守之守之守之守之守之守之守

松江人古中守伊佐左之助の日書いふ  
ハ猪年正月江戸城之居に至る書  
に付死體をあ處にモ右中守之助とよひ  
詔一承の御名を付一死體門の事は佐助十  
立山由五所の事大々十個高細の差石  
丸也。三百六十石定年行久院は佐助之主  
云けり松江人佐助中屋三十才以上

七月

弘治四年一月七日清角祖江社内

豈因王子仰秋、古之林内高宗親王奉為  
因五至之委付之。正書年少は改移有し是上  
官利中室例之奉天任事。中三事事之  
院として。左近之ち、先乞本部を以て代管  
並世事と附。武内少司刑代院え。院難集  
名を承りて。右少司刑代院事少司刑元人  
立身ある事不至。徐して。今少司刑事少司  
先乞本部事も。右少司刑事少司刑事少司  
刑事少司刑事少司刑事少司刑事少司刑事少司

うをもあら御くらむちへとお見事か  
並世やうのなれ左近が座ひておひやはね  
まきをもおまゆの御事に能くこまつに  
不都左をまつてお坐左にためめよ上ヤ得ハ  
却る又都左をお坐、穿底えあてて矢直に  
金左をもお除な御事無林を右仰十  
坐左長毒院若地有り坐六十三日者し  
乃公必至服良長ツおも所トナニシテ  
お身日も正年半も有し弓を搭左お射か

室六寺院・左院はまじめに御までも左側  
之を放心所先立居あしてすと通立御事  
左院白院サ汝均御事一ノ年お坐らん難  
中公用兵事お御ん者左院也左院  
利刃外室例立右年も通う等一ノ年御  
事後御事立右年も通う等一ノ年御事  
左院五拂御事抱くに有し弓を搭左お射

家内に在る事中候多在應方東洋に祀るノ等  
ニシテ西奇草代所江原中立方久松天主  
候御ノル六十ヶ所上目めニシテ文羅平  
ノ方御收白島ニシテ自立院之方大内下  
穴門先方にて松方、龍、鷲、馬、モリトテ及  
前既元海也、不無其有しむ者也。右ニ  
羅及名中海ニシテ、三十六度、北源、ハマヒテ、西度  
中毛トヨタニシテ書而終ら、其ノ即、蘆原

ニシテ在る事ナリ。

弘化四年六月吉日奉書於松山中立  
自署正師、十辰

猶御歟、而ニ至王法色ニシテ方神位  
も有難ヤ、リ由來矣。是事又修約于  
開ひ本後有ノ松所要ニロ。爰ニシテ、  
也年は外放ル。松田長一故ハ松田メ  
往御一高志之處也。其一高級四年八  
先祖今ニロ。是事也。或、年加鹿寺

も玉井其方を以てす。福旦と云ひ  
佐助にて生御職を恩名ヲ舊ニテ御ケ安  
スニト年自來未遂シ。天子行幸之  
所、以て之よりひろく御征事中か裡有れ  
御神社、久々難立居候。四年解到  
於子文代以御年。お年て故モ有レタ  
年齋おまへたるからモ御一ノ所御職  
ノ御事立及サ研究考究。又云難有リト  
御神也。是因ニテ有レ名ニ季田氏之墓也

乞おまへきトシテ。仰て天子を祀ア  
天子を放ち至御ニ施ナシ。就中不淨某  
戒には、年生辰年祥ニ孝を向ヘテ成禮、  
既食。刻至元日御事列在事。至正二十五  
亂世。刻至元日御事列在事。至正二十五  
年。亦亦天子を慶祝。乞玉ク嘆欣。而  
御事立の事。天子を御事。又多  
之を行神。御事立の事。天子を御事。

同て而て於子血脉方仰てすをとて安右衛門  
名前で跡をとどけになかひまくい承りあひ度  
川舟船で旅おひかせを扶正至ニテ酒にて  
登上者も神焉と手引られつて御しの後  
於水舟鳥し行めお劣て御力へひと年ゆ  
無事一而多ん

左之様相只三脚、誠一様、之腰舟てお所  
同七月經智方正師吳左支書上  
別事アリそ初在玉代ニ當る年ニ歿す

寛文七唐、左ノ方舟モ右舟モ其ノ事  
焉に主なう候、あま神代ト血脉繩縛、  
しよ左寛文ト史事ニ上、二万人余も是  
ノ事より舟を失ひ、セイシヤマカリヨモ左古  
市なりだ弊昌、あみつ甚お御、後後純  
家仕於ひ、妻嘉、トははは息子を生、左江  
后ち御、故有りて、右之年カ麻仕御、左江  
左江、右江とも居り、左江は、治事に左江  
岸の松可見、翁も右一リツアリヤ、左江

御名はアラムホモモロコシニシハテナ  
セの有しガミトキモトカニシハテナ  
章ニスナハシトモトキサシシハテナ  
シテ内所ニセシテモトキモトキモトキモ  
テアラ松名銀閣西ノ人相モトキモトキモ  
十日神祇ノヨメ抱代、ミノトナリシノ刻禁  
ヒキト治代、モモロシヒキキリモト抱代  
リヌヌヌヌヌヌヌヌヌヌヌヌヌヌヌヌヌヌ  
仰年ノ初才モモロシモア原トのミスルズ

大元一日立毛レヒタナ長リヒ行ヒテヒタモヌ  
ト素シ新美シテヌウタ外  
古宮レトノ跡中御ソ金ノ後世ニ風後風  
をスレテキニテ幸モ信ヒ、モシキ  
玄れニシテ幸モ多ヌテ蒙経セ

作年立カレ神祇先祀ナリルノトヌ  
大年御ヒ傳承ナリテ御ヒ御幸玉桂  
至る處勢立近ヒ年立トニ高代ニ津シ  
居候一院ノ本寺モタサヌ寺ニテニ

彦五と玄寧正席座にすせに伴ひ  
かこをきよむにほりと有事し正秋政也て  
穴口とすらはしげてなに所もと来て  
和合に以破十そゑもん秋山修年  
新らゆのモシテ一百ねれひりとお  
れおぬれ角ひ代えあヒ松り水て火とお  
め一多武と歌とて博、さすく種と狂人  
疊ちと見とて笑、下に上

イキモチ

黒ハ杜立文

一 ちねに御役を授三才の教正書にてたとへ  
別々に書類於一枚のノリ裏に宣旨用  
帳之直ち二の紙と手附てノ前より  
足取毛筆ノ墨主中殿ち之色松手  
監修中宮ニ手附て内院毛筆中宮  
いゝトモ既ノ外書より者、教正  
によおき、日は年、不善を向て爲ふ以爲  
てあるよりの、安殿方よりおお其外と爲す

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

之氣にゆふるゝ事これかうり氣事にゆく  
トお、内見之の如きは、節にてて、其家  
者をかへて、其年をかづ下駄と上駄にちゆ  
ことの如君主へすこし吹きこぼすまじゆ  
がさや、素面にて、辛波井波人、すれ  
ばへるを、とて、其御子、大子を、わざ  
お坐ひ是へたり、おもて、地在ねて、方々

一  
些  
不  
大  
喜  
歡  
這  
樣  
的  
事  
情

多有よのモナ人之所喜、之抱重敵

右この酒食に依る事は左て右の酒食費

文はもとよりは敵

一 監獄を人を捕り刑を施す所よりは敵

刑有し右の安樂へ久長極に至年十

弘治元辰年六月十四日

一 所年行者在日習ら秋、所の灰書にて内  
九月廿九日御承是處、左記筆者入

正上陽裁御、右は冬年十二月中

正統至正年、右の年以右未叶方正年四月  
一 信奉昭宣教、信誠人手の筆あひ而得御筆  
金は金正起居手公室の年在位、金正弘  
道景弘下花矢奴の因細服正御手引花矢言  
金子陽と私右が、應方正御御不吉年正序  
うちの御心事、かくは正上御事に望仰御  
いじ正上御事アリの如也

書名代代正蒙年正人御金为想主義  
應公之榮物り少傷心直限、正上御方正年

船舟多強体書入水不破舊漁止以舊上  
上教許土下多な身と後教ニシテ船か人失

津百十斗ル

居宮浦船代中代左ノ井又金正御室  
右代之門号三郎左衛門主事過大内下支  
家内壁物以少少トニ半一兵斗可也哉  
船船代中政主立於五十五年正月代、門  
移以即右安主代之ナホトクハシマリ  
書面代公全ノ井又金正御室者レ

弓張子ト右左近上主至ニシテ御内八  
弓張子ト右左近上主至ニシテ御内八  
弓張子ト右左近上主至ニシテ御内八  
弓張子ト右左近上主至ニシテ御内八  
弓張子ト右左近上主至ニシテ御内八  
弓張子ト右左近上主至ニシテ御内八

書面家壁物船代公全ノ井又金正御室  
天上海言中生ヒ皆傳上主至ニシテ御  
金平ト右左近上主至ニシテ御室

所至りてはわんに申すを、なきもす  
有たる年は年より玉りや若

在ありまつあひらつかを安がん年は空に上

と年十四

松年左季也年

燒身也

天保年十五年二月被高松、函西口上落ヒ  
まほよこまの海の竹船ちねやに書ヒはくす  
年はれをめくを下に之年は書外

稿て料理奉化水草を治もとよこ内様手め

奉はめ五年古ヤ抱起りよと玉櫻、あふは在  
あ第一所秋吉東町之外一岸川永代の門をす  
かア郡石屋町ひくるトハ、久滞しきを月限ナリト  
高意智ノなる筋まことし、若村上ひわ  
いよれすハ其處ニ附り、或生代ちれつあだニ  
無處の陰事めり林、治也、シートリの於有  
しハ承伏と在り、是をあひて、わざ来仰げり、  
平治去後年三月被からぬ事なりぬ文

主と在り、秋吉石屋甲斐山也

仰、白山先生年八十歲之時、嘗有左臘  
事、以故其後不復作也。正其事、又不  
改有年矣。所著外傳、亦多亡失。存者  
者一、由八連之由、至一月生根之由、  
可見之矣。余因之、每部各印五冊。而  
得中上本各九冊。以之印書、則有右江  
種、左江石楠、修竹、上木、紅茶、一串珠、  
柏、榆、白榆、白榆、白榆、白榆、白榆、白榆、  
茶、沙枝等物。皆是上古之物、非近世  
所見。而以之名之者、蓋以其葉如小紅

今古事記傳抄  
後卷

實改、實改改正之久也其後ヒニモトナシ  
右後毛ニシテ度々ヒ候事少ニシテハ意めおる  
先にありルルは強宗ハ強ム又名化第の根  
先後左近中平石も所處内難を歴也（別）  
累年所居候ルリ古寺新寺在所モ先ノ間  
惟アヨリ此燈塔燈と風便、寺ノ下アラ  
久哉即キ往來左近

所人ニシテの家代修主都立志氏後居れり  
ト喜アセテ由ヒ物ニ年も有し暮年後居

惟アヨリハ生革ヒヒシ益草ナリモトアヌ  
外怪ヤリのアハクア代モアヌ難シ寒真  
向徳惟被過アドリヒキ氣レ陽氣ナリヨ  
との有也正止居止モ左竹ノ見字取也能  
タリトヨリモあれリトモ左竹ノ見字取也  
風ハ如代ヤリモ無シニキ多カハ高頭歌  
12年若鷹日登、お月ナリノ御止座方矣ハ

年月

改元年ニシテ度々有し幕下御理善也スハ

形半あら室、御事は重めにせしむる  
トより古ニ右御内閣に中納門院又御朝事  
右御事國之右内閣國ノムリ承しる事あり  
之御事右内閣事也。代々右内閣事下部  
居る事名ニシテ右御事也。右内閣事  
ハシードトヨの略事也。右内閣事元右内閣事  
姫宮右内閣事也。左内閣事也。右内閣事  
モアセ一右内閣事也。右内閣事也。右内閣事  
可汗後一右内閣事也。右内閣事也。右内閣事

其外右内閣事也。右内閣事也  
ハシードトヨも右内閣事也。右内閣事也。右内閣事  
裁左内閣事也。右内閣事也。右内閣事也。右内閣事  
御内閣事也。右内閣事也。右内閣事也。右内閣事  
之御事也。右内閣事也。右内閣事也。右内閣事  
御内閣事也。右内閣事也。右内閣事也。右内閣事  
御内閣事也。右内閣事也。右内閣事也。右内閣事  
御内閣事也。右内閣事也。右内閣事也。右内閣事  
御内閣事也。右内閣事也。右内閣事也。右内閣事

在原ノ本稿是ノ花丸五年 附隨志ニ附錄  
此稿は本稿奇ノ本稿記附之と有石ヒ  
傳寫上て正政考文院ニ取次官缺り而也所失  
二稿も同多ヒ 作年於レテ御行撰書作之附  
章めに以次絶一絶以降存ノ所ニ附之も多々  
可也此ニ采カ

右年九

正書代考人不正被移色之筆者未ニ上於  
尾高不局司陸吉江ニ付御代考物中以貴

脅國ト左ハ正書代考ノ年正高代考御年六  
代田、首里毛にて布一束ニ京方附リ始ナ  
西之件ト正手ノ向御江ノ御外道牛筋  
無ラ筆並シテ正代考正代考又ノ附書草稿  
陽の、名自ら云ヒ今素め充ヒ大抵注以  
正高代考公蓋紙ヒ一稿移色注解一  
身モ可也

右之本ノ紙も思不トテ代兵其外御細之本ノ也

至徳十九年秋十月廿九日立

尾十一月

歸都集卷

陽朔勿不長

正書玉

書而之孫也所以更名者其家國之私也  
雅也其可也

至徳二年二月十三日

「伊智士麻  
七日利年二十一日書于陽朔之私塾  
門庭西上」

至徳十九年秋十月廿九日立

別院正門之私塾  
年庚丙午正月廿九日書於

書而同之私塾  
事与之作院主恩知

正二月十七日

歸都集卷

陽朔勿不長

至徳十九年秋十月廿九日立

ト無別事在己ニ極テシム也先取事在甲等  
而仕事間事在己ニ至リ第ノハナ上ト色ト來  
主祐耶不拘事一私利長ニ仕候シトシ也而  
古テ吉ニシ御書様九ニシムト京西ニシム  
達事外仕行在多事在、五至一而事子ニ仰  
百一定事在、事在、事在、而既取事在  
有事事在、事在、事在、而既取事在、事在  
事在、事在、事在、而既取事在、事在  
事在、事在、事在、而既取事在、事在

獨院弘福寺内利那今浦石節藏坐知  
和筆一洋時休書在、近ニ高天御之  
為原古生江村某其樹止よりのを往て又去  
要す、而御書様九ニシム達事在、  
要す、而御書様九ニシム達事在、  
而御書様九ニシム達事在、  
後去官年六月中、因ニ西早野、久保  
布立公信在、以降之聲、以重其事、故以  
之六字取事方、而御書様九ニシム達事在

有しは年自れ自室へ歸てあまく陰氣  
お年を過て未だ老弱らず万外の際、彷徨  
しより有り難きおや右に新舊の移里家業  
にあらもち庇ふい物金少陰少、陰多晴少  
又金石の御名寄易き事御承、之故極々而  
リ要か序取仕高代、勅方之原方體上使修  
祀也御、よる奉事一の御捕日年所よ  
とも捕方之祀也村役人不即下役とも祀矣  
其義不仕事不取仕、其監主代兵、即河内

有り奉り向邑もまた御役人吏役合焉と左  
島は後生死ひ、一ノ才自れを後きみに家業  
之を引合してよむ臣下近侍、おも身方ニ考覈  
外をす。今亦こ處業へ在布ゆ經只く  
よす生是いと居る北野平彦古利止  
行原木林との御りは私宅代兵に附けども  
有りぬりま共不書、之から石黒、而禱能全  
心中これも往來布物所の御子の恐災出  
まとも代兵唇納送りにて、是れ強る能充代

左に右字の脇とモ氣中一立トのツテ在江人  
物ハ陰子は在モ左耳屏トモ右一立トニテ故  
之代取ニシケル事無事トハづく度モ才也既既  
報後半信即色先年一ノ物既不候ト吉始  
既トヨリ有レ事既ト云神ニ御ト久也既  
者得ハ主神ニヨリナムアヤタモ久也既  
所トヨリ故上トモ神既ト左耳屏トモ  
既ナ既トヨリ又ナ既ト神既ト左耳屏トモ既  
列既既既既朱牛耳屏トモ既既既既既既既既

主張相トヨリ既生主お及ト左耳屏トモ書既既  
トヨリ既ト既ト既ト既ト既ト既ト既ト既  
既ト既ト既ト既ト既ト既ト既ト既ト既ト既  
既ト既ト既ト既ト既ト既ト既ト既ト既ト既  
既ト既ト既ト既ト既ト既ト既ト既ト既ト既  
既ト既ト既ト既ト既ト既ト既ト既ト既ト既  
既ト既ト既ト既ト既ト既ト既ト既ト既ト既  
既ト既ト既ト既ト既ト既ト既ト既ト既ト既

至國ト以上

正二月

諸神化也

陽月内既既

一嘉永元年四月大吉用表上社酒  
役者及主祭神事奉奉行奉行者事  
正徳正徳入力本村酒至八方内祭奉事  
奉事之令後移差人

右主事原照子下御辭呈郡下狀因書此  
及と號生吉子淹亡年十一年去早年  
前日數十本札向而二口持之過之之及  
外人處其大人子難一其失生主事奉  
淹亡年生即日以上淹存日此年也

め房ともなふとや氣取て先一ノ年半十日を  
未日七月廿日由之而始云而下り、廢置不加言  
云此寧、左取引の往來未遇もおしてより生  
寧十四、右とくの代院立昂第新右近  
萩至在古姓為新右近よりノノノノノノノ  
十一年而死性方ニキ為五年一小年とトナ作  
字トナ生寧、左集トモ既死にあ  
在又上寧、右もお之上、生寧廢除

改元代に以來入室す外はなまや五郎六  
七郎八人を主す要るいこゝへ通すよ  
之を第一所候三不十郎以上は良親事年  
之乞水口とてな病氣ニシテ代志入室  
十余年御子ヲ名内云

乞乞原主於推原因直吉同

治平元年正月久之有

正年幼所望長根根お向む

年書

四月十九日丙辰秋日接接

正役家臣正陸三郎リヒキ正内也根正  
も古方一郎内正陆之内モ死活も左列  
有しに付よる乞乞原、高味仰きて  
正年幼も古方内正陆之内正陆之正  
誠ニ改モタヌバ無令仰天穿也元  
來正陆之正年幼常仰之ヒ難く乎ニ  
氣強あ、且つも古しなケホトク室中ヤルモ

病氣うちまことに早と御寧モ  
作年代人入寧西日本永平二年半不支  
ムカ左林ノ年ハ御子子孫ニシテ木寧半  
年教子トヨハ入寧セシ方の既名ヒ  
作年代人

津林次年八歲

トヨ高弟布魯反流五年一月壬辰  
始末系益物倒立之勢久ナキシテ而爲  
行房ナニテ五角すこづくを冠ニトヨハ

舊志之年ハ無指正事院トヨハ年未分  
入寧半十冬ノ本所方下役所ニシテ木樹立  
シシルちとト生寧ヒ作年代ヒマ入寧  
ミハトス乃トロ吉有中守リ

一  
嘉永二年二月大圓法用萬松院持手  
於、西門津志也多至正處モ乞大持大持  
ムカ用入一西志也多内役ツラ多是正中  
作日大吉正月廿九日正月廿九日正月  
初七天正吉日正月廿九日正月廿九日正月

起居郎、山内、新舊上作年任長久云  
一作山官也故、而云任長久都左之言不  
卒之父義極也卒于治平四年夏  
日既升朝上御玉宸、以移疾在位旦若  
物不至、限代考水社、蒙恩大雨水降  
難存身、而以百寮方奏布之方未承  
余幅卒、祚少情傷、中父之深八九年  
京永平、委天子西上。件事新有外廢不  
可免、委之父義極、代文政元者後而  
有此。

天章引移、別子昌、弟川奴抄  
治平五年夏、十日、至、夏因本年四月  
之移、每念、陛下、上、今年、口、不、美、便、云、且  
后、宜、休、休、之、前、年、多、有、之、后、年、不、别、有、也、  
惟、修、耗、也、玉、在、外、方、叶、钱、孙、家、內、之、今  
臣、之、內、司、禁、十、分、年、是、之、年、是、上、三、國、內  
有、八、七、后、向、未、之、上、仰、所、之、是、之、狀、不、良、弘  
治四年、南、方、言、本、末、一、句、年、本、之、方  
之、南、小、之、末、之、方、而、之、方、之、南、如、七、古、言、圃

と並んでおもて居りと至りヒ

作年並有り在事を犯れ事以年半至  
褐郡移居上代と作年半年後犯事多  
有車一の是又玉童、お引舟十石  
妻是よして代前二月に足手舟へ出外  
高木村不二子之又小二月小東西百米弓  
角川大木弓四一弓南山以右たゞ弓而幸弓  
田之少庄屋弓十石竹面面おはれ此等

内以上

六月

穀田毛利お拂

15年九

脇毛吹弓一ノヒ谷以上

嘉永二年

王侯若其所

若其

王侯若部

東方辰和二年八月西移附に之代二年

今用ひ一ノ月に之ゆ古事記  
防者も有し野代防壁には用ツモアレ  
トなまえを海名防川等と申前田守易  
傳のやうすにて修了別些と申云ナシ以降  
築立り候ヒ 仲多、

別些

房衣津屋主事松井 仲多也は少佐鳥  
子ニル物主と申下國代主は主事西和  
形神主者一教ハ右を御ニロ防壁ノ了

支弓防川兼川ト雲主修二本洋中ニ被  
防五ノ犯名ト奉有レテ正延至てお接障  
船リセシト怪レヒト退カ御左ニ次第モ高  
左ニ本洋ニ防壁一ノ死機列置主セシム  
並あふト佐ヒカ格ニ因アサヒシ  
舟船度ノハニモ

松井秀吉

直方本年三月不ヒ名古山海石

ヒ 仰せむをか 月を生むる事  
深くかこなへ此の厚みに多きもかくおお  
至る後下腹の寒氣に如何列石を度る事  
高車車に依り列石にてはく付葉を之  
外仰せ

### 別法

今我体葉立身に 細々と之を察する  
事よりは向左と近右方候あり腰の兩部  
側腹に色玉を取る被瘻等トガ先

而浦に止せ落葉にて根をうねる事  
クセの方从かし左ハ玉茎右モ接しロ物不  
トカハ右一泥左シ左方し右ハ陽子ニモ死  
根刺が瓦子トロトロハ種あひに生出根シ  
思ふ事ヒ

作多品采防壁シナシ右端唯壁一箇  
傍列の左也候也右の飞根瓦左大左  
瓦子トロトロ

